functional image を作製し，MTT については，全肝領域の値を print out した．正常例の MTT は，13～18分に分布し IH 及び MTT image は diffuse であった．軽度肝障害例では，MTT は延長傾向を認めたが IH, MTT image は共に diffuse であった．重症肝障害例では MTT は 30 分以上に延長し IH, MTT image は共に不整な分布を示し，original scintiphoto では認められない異常所見が得られた．肝胆道閉塞例では MTT image において肝内部に局所性延長を示す hot area を認めた．本検査法は短時間で全肝及び局所的肝血流及び排泄機能が定量的に測定され，image として描写される点に特異な価値を有する．

20. びまん性肝疾患における肝スキャン所見の検討

小泉　潔　井田　正博
立野　育郎
（国立金沢病・放）

びまん性肝疾患に対する肝スキャンの診断的意義に関し，漸次その評価は高まりつつある．当院における肝スキャン症例数もある程度増加したので，ここにその評価を試みる．

〔材料と方法〕 過去2年半の間に行なわれたスキャンを検討した．^{99m}Tc-スズコロイド 3 mCi 静注20分後の前面像で検討し，肝自体の形態分類，脾所見，骨髄描画の有無を見た．

対照となった疾患は，スキャン前後に，肝生検により確診された 169 例であり，内容は肝硬変21例，脂肪肝21例，急性肝炎47例，遷延性肝炎12例，慢性肝炎活動型59例，非活動型 9 例である．

〔結果〕 肝自体の形態上，腫大や萎縮を示さず，正常肝とされたものは，肝硬変では 38% であり，他の疾患では 56～70% であつた．

脾腫大出現頻度，脾濃度亢進頻度は，肝硬変では，それぞれ38%，66%であったが，他疾患では，5～11%，11～22%であった．

骨髄描画も，肝硬変にて高い頻度であつた．肝自体の形態，脾所見，骨髄所見の 3 者ともに異常のない例は，肝硬変 14% であるが，他疾患では，44～52%であった．

〔考察及び結論〕

びまん性肝疾患における肝スキャン所見は肝硬変においては，異常をきたし易かったが，他の疾患では，その半数近くが，何ら異常所見を呈さなかった．また，疾患の間に有意な所見の差は認め難かった．

21. 脾描画を認めなかった ^{99m}Tcスズコロイド肝スキャン
―膵癌による脾動脈閉塞の 2 例

斎藤　泰雄　寺島　克賢
河上　幹夫　吉崎　亮
（富山中病・放）
油野　民雄　前田　敏男
（金大・核）
松井　修　高島　力
（金大・放）

^{99}Tc スズコロイド肝スキャンで，脾描画を認めず，血管造影にて膵癌による脾動脈閉塞を確認した 2 例を報告した．我々の症例は Spencer らのいう "aquired" functional asplenia の範疇に入ると考えられるが，脾動脈の癌性閉塞による Functional asplenia の報告は文献上認められない．この理由は，種々考えられるが，脾描画の低下及び欠如に対する関心の低さも一因となっていると思われる．今回報告した症例は，次の点で意義があると思われる．

1) ^{99m}Tc スズコロイド或は ^{99m}Tc サルファコロイド肝スキャンで脾描画を認めなかった場合，Functional asplenia を疑い，特に膵疾患の可能性を念頭に置く必要がある．勿論，脾の存在を確認しておかねばならない．
2) 肝に欠損像を伴う場合，膵癌を疑ってよい．
3) 前面像，後面像にて脾描画をみなかった場合，積極的に左側面像をとる必要がある．

Presented by Medical*Online